

《国内展望》

日本から消えて失くなったもの 日本人の手の中で光り輝くもの

(2011年7月16日)

3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震——。いわゆる東日本大震災は、被災地とされる東北3県を中心に、日本中のあらゆるところに傷跡を残した。この大震災で生活基盤すべてを失った方々も少なくない。親や子を、あるいは最愛の人を奪われた方もいる。家屋や家財道具、生活必需品も消えてしまった。こうした惨状を目の当たり

権威の喪失

東日本大震災以降、日本全体に大きな潮流が生まれている。それは「既存権威の失墜と新たな価値観の誕生」と纏められるかもしれない。あるいは「下剋上時代の到来」とも表現できるだろう。

化けの皮が剥がされ、権威を失った最大の存在は内閣総理大臣だろうか。いや、政府全体、政治全体が権威失墜状態だ。

原発事故では、経産省原子力安全・保安院というお役所の権威がボロボロになった。もちろん東電の権威など遥か彼方へフッ飛んでしまった。そんな状況下で小賢しい木端役人の代表を演じてきた経産省原子力安全・保安院の西山審議官が、女性問題発覚で保安院広報担当を外されたことなど、権威失墜の象徴的な出来事だった。

にして、多くの人々は価値観を劇的に変化させた。過剰な表現をすれば、日本人全員が襟を正したとも言えるだろう。

直接的な被害を受けた方々だけではなく、多くの日本人が「生きざま」を変えた。それは目には見えない底流となって、日本人そのものに変化をもたらしている。

放射能汚染問題に関して、原発支持に立つ東大の学者等曲学阿世共の発言が揺らぎ、ここでも東大不信、学者不信、評論家不信といった権威失墜の連鎖が見られた。福島原発事故後の最初の原発再稼働になると見られていた佐賀県の玄海原発2、3号機に関して、九州電力の眞部利應社長による「やらせメール」事件も発覚。日本中のあちこちで、庶民大衆は権力者をまったく信用しなくなっている。

多くの人々が、既存の権威を認めなくなってしまった。

省庁、官僚どころか、末端の役人など、何の価値も意義もないことがバレてしまっている。

新聞TVマスコミもまた然り。節電を謳

いながら相変わらず深夜放送を続けるTVに怒りの矛先が向かったら、最初に困るのは日本の情報産業を仕切る電通、博報堂等の広告代理店だろうが、それはすぐに新聞TV業界を襲うM9.0級の激震となるだろう。

日本の状況が激変し、大衆が権力や権威を信用しなくなりつつある。そうしたなか、なお役人風を吹かす愚か者もいないわけでは

恩を仇で返す

7月9日『産経新聞』に見逃せない小記事が載った。「被災支援の緊急奨学金『国交ない』台湾除外」というコラムだ。ご覧になった方も多いと思われるが、短いコラムなので、以下に記事全文を採録する。

「被災地支援の緊急奨学金『国交ない』台湾除外

東日本大震災の被災地の大学に通う私費留学生を対象に、国が緊急措置として支給を決めた奨学金を募集した際、台湾からの学部留学生は応募資格がないと除外されたため、申請できなかったことが8日、分かった。

文部科学省は『台湾と国交がないため』としているが、台湾から約170億円の義援金が寄せられた中、柔軟性を欠く対応との批判も出さうだ。

文科省によると、同省は被災した私費留学生を支援するため、平成23年3月の1カ月だけ、日本政府から奨学金を受ける国費留学生として扱う『緊急援助採用』の措置を決定。成績なども条件とした上で、学部生への支給額を12万5千円とし、3月下旬に東北や関東地方の各大学に通知して募集を始めた。

ところが、国費留学生制度は『日本と国交の

はない。

古来、日本に限らず中国や朝鮮、いや世界中のあちこちに、絵に描いたような厭らしい役人がいるものだ。上には滅法弱く、揉み手をして頭を下げる。下に対しては権威を笠に着て、圧倒的に強い。こんな小役人には、時代が変わっていること、もはや彼らに権威など微塵もないことを知らせたほうが良い。

ある国の国籍を有する者』が対象。今回の措置も同じ条件を付けたため、台湾の留学生は申請できず、栃木県の私立大では留学生が大学側に抗議した例もあった」（『産経新聞』9日朝刊）

事実だとしたら、とんでもない話である。

日本と台湾の関係は、とくに3月11日の大震災以降、血族関係以上の強い同胞意識に支えられ、「絆」という深い結びつきを持っている。文部科学省の末端に位置する木端役人が台湾の留学生を不当に扱ったとすれば、まさに「恩を仇で返す」行為だ。

そもそも文部科学省とは、「豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成を図る」ことを任務とする（文科省設置法より一部抜粋）機関である。その文科省が「恩を仇で返す」ことをしたなら、由々しき出来事として糾弾すべき問題である。そして調査を進めたところ、誠に残念なことには紛れもない事実であることが判明した。

留学中の台湾人学生が、日本政府が外国人留学生に対して支給している東日本大震災の補助金を受け取ろうとしたところ、学校側から拒否されたというのだ。これにつ

いて台湾からの留学生3人が学校側に説明を求めたところ、「台湾は国家ではないため、台湾からの留学生は補助金を受け取る資格がない」と回答されたという。

栃木県宇都宮市の学校に通う台湾人女性はフェイスブックで「各国の留学生は補助金を支給されている。台湾は震災後に多額の義援金を贈ったのに、こんな目に遭うなんて」と不満を露わにしている。その不満は当然のものだ。

学校に対して文科省が“指導”したことは事実。恐らくはその背後に、民主党政権があり、中国（大陸）政府に対する民主党本部なりの“気配り”があったと言われている。

日本と台湾の特別な関係

東日本大震災で失ったものは大きかった。そしてまた、思いがけない支援を受けて、涙を流した。

タレント、芸能人、プロ野球選手……予想外の人々による熱い支援活動もあった。大型トラックを連ねて炊き出しに出かけた俳優もいた。もちろん“わがままな”ボランティアや、ボランティアに名を借りて空き巣を働く不届き者の話もずいぶん報道された。

阪神淡路大震災のときにも活躍したが、今回もまた“日本のアウトロー”暴力団という官制用語を乱発される任侠の人たちの支援活動には目を見張るものがあった。大新聞やTVはほとんど報道しなかったが、海外メディアやネット上には、任侠の人たちが死力を尽くして救援物資を運んだ様子が生々しく伝えられていた。福島第一原発

この問題に関して台湾外交部は、交流協会を通して、補助金支給を行うよう学校及び文科省に交渉中だとされる。交渉次第で3月に支給されるべき補助金が改めて支給される可能性はある。だが問題としたいのは、そもそも何故止めたのかである。「台湾留学生には補助金を出さない」と決めた文科省の木端役人に対して、私たちは日本の一市民として、糾弾する必要がある。糾弾する前にまず、こんな連中を「台湾と日本の歴史も知らないのか。この馬鹿野郎！」と怒鳴りつけ、その横っ面にめりこむようなビンタをくれてやったほうが胸がスッキリするのだ。早い話、こんな奴はボコボコにしたいのが胸の内である。

の決死隊の中にも彼らの姿を見ることができた。

さまざまな階層の方々による形を変えた支援活動。こうしたなか、忘れてはならないのが台湾の人々による莫大な支援活動だ。

本紙6月4日掲載「台湾の方々、心よりの感謝をお伝えしたい！」を是非再読していただきたいが、東日本大震災に対する台湾の方々からの支援は、物心両面にじつに細やかで莫大なものだった。

改めて説明するまでもないが、台湾は九州程度の大きさの国土で、総人口は2300万人。サラリーマンの平均月収は日本円にして13万円ほど。しかもかつて日本に統合され支配されてきたという歴史を持つ。

そんな台湾がなぜこれほどまでに日本支援を行うのか。

戦前に台湾灌漑事業で功績を残した日本

人、八田与一の記念施設落成式に現れた馬英九総統は、1999年の「台湾大震災」(M7.6 死者2400人余)や2009年の「台風8号災害」(死者667人)の際に、日本が救援隊を組織し、義援金やプレハブ住宅を提供してきたことを挙げ、「台湾が当然すべきこと」と語った(5月8日)。

台湾からの義援金は、7月に入って170億円を超えた。途轍もない金額である。そんな台湾の方々からの熱い支援に対し、台

台湾を死守した根本博中将

日本と台湾の特別な関係は、両国が持つ歴史に起因している。その背後には、幾重にも重なり、綾をなす深い物語が存在する。先に記した台湾灌漑事業に貢献した八田与一の存在もあるが、大東亜戦争後の1949年(昭和24年)に起きた金門島防衛戦を見ただけで、日台両国の深い関係が理解できる。

この戦いに参戦するために、元帝国陸軍中将、根本博は、GHQ占領下の日本から小舟で台湾に密航。金門島防衛戦に死力を尽くした。金門島防衛戦の背景がわからない方もおられるだろうから、念のため概略を以下に記す。

最近、門田隆将氏のノンフィクション『この命、義に捧ぐ／台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』が発刊され、歴史的事実が詳しく書かれている。

大東亜戦争後に再発した国共内戦は、当初国府軍(国民政府軍)が優位に立っていたが、毛沢東八路軍はソ連の援助を得て満洲を手に入れ、旧日本軍の最新式兵器を接収して軍備を増強。人民解放軍と名を改め、大陸の主要都市を次々と制覇。1949年10

月1日には毛沢東が「中華人民共和国」建国を宣言する。国府軍を台湾一帯に押し込んだ毛沢東は、中国の完全統一を目指し、怒涛の進撃で1949年10月初旬には台湾を望む福建省海岸に押し寄せていた。目の前2キロ先に金門島。そこから140キロの台湾海峡を挟んで台湾が浮かぶ。

なぜ日本と台湾の間には、こうした深い結びつきが生まれるのだろうか。

人民解放軍の金門島上陸、台湾進撃の総司令官は、当時「常勝將軍」と謳われた葉飛司令。上陸部隊は人民解放軍第三野戦軍の精鋭2万数千。迎え撃つは国府軍総司令、湯恩伯將軍、顧問参謀、林保源以下将兵8000弱。——顧問参謀、林保源こそ、中国人に変装した根本博中将だった。

根本は人民解放軍の上陸地点を北部中央と断定、これが的中する。旧日本軍お得意の戦法、塹壕に隠れ潜んでいた国府軍兵士は、敵軍全員の上陸を待って木造ジャンク船200隻を焼却。退路と援軍の可能性を断たれて動揺する敵軍に対し、金門の虎と呼ばれたM5A戦車21両の37ミリ砲が炸裂。3昼夜に及ぶ白兵戦の末、村々の民家に身

3昼夜に及ぶ白兵戦の末、村々の民家に身

3昼夜に及ぶ白兵戦の末、村々の民家に身

を隠す敵兵を西北部の古寧頭に誘い込み殲滅。解放軍死者2万超、捕虜6000。国府軍死者1200という完勝だった。

終わってみれば国府軍の完勝。台湾はその後人民解放軍を寄せ付けずに現在に至っている。しかし戦の直前まで、誰もが毛沢東軍の圧勝を確信していた。あとき金門島に渡って防衛戦を指揮することは、間違いなく死を意味していた。事実、根本博元中將は死ぬつもりで台湾に渡った。死んで恩義に報いようと決意したのだ。

なぜ根本博は台湾に命を捨てるつもりであったのか。

蒋介石総統の恩義に報いるためである。ただそれだけ。それだけのために国禁を犯して命がけの密航で台湾に渡り、死のうと決意したのだ。

昭和20年8月15日の終戦のとき、根本博は駐蒙軍司令として蒙古薩南政府の首都、張家口にいた。ほんらい直ちに武装解除すべきところだが、解除すれば、ソ連軍の怒濤の攻撃から駐蒙軍4万兵士と在留邦人35万の生命を守ることができない。根本は責任を一人で負う覚悟を決め、ソ連軍との肉弾戦を命じる。その苛烈な戦闘を戦い抜き、在留邦人全員が北京に入った8月21日に根本は撤収を開始。糧秣乏しく満身創痕になりながらも、最後は軍服を正した駐蒙軍が北京に入城した折り、これを敬礼で迎え入れたのは蒋介石総統の国府軍だった。肉弾を以て民間邦人を守り抜いた日本軍に向けた、蒋介石総統の武人としての敬意であった。かつて砲火を交えた敵に対する怨讐を越えた、蒋介石総統の武人としての爽やかな姿であった。

その後、在留邦人の内地への帰還、北支

那方面軍30余万人が無事復員できたのは、蒋介石総統の尽力に依る処大だった。

根本博が蒋介石総統に恩義を感じたのは、在留邦人や日本軍に対する温情もあった。

だが根本が最大に恩義を感じていたのは、昭和18年秋に開かれたカイロ会談での蒋介石総統の言動にあった。

カイロ会談とは1943年(昭和18年)11月末にエジプトのカイロで、ルーズベルト(米大統領)、チャーチル(英首相)、蒋介石(中華民國主席)の3者が話し合ったもので、この席上、蒋介石総統はソ連による日本の国土分割案に反対し、日本の天皇制維持を主張している。

日本が戦後、南北に分断されることなく、天皇を戴き、現在の繁栄を築くことができたのは、カイロ会談で蒋介石が日本の存続を主張し、譲らなかったこの一点に尽きる。根本博中將はそれを十分理解していた。蒋介石総統の恩義に報いるために、だからこそ根本博は死を覚悟して台湾に密航し、金門島防衛戦の指揮を執ったのだ。

日本と台湾の関係は、これだけでは語れない。

しかし、この歴史を知るだけで、両国の深い結びつき的一端は理解できる。

台湾留学生にだけ補助金支給を断った大学職員は、この歴史を知っていたのだろうか。文部科学省の木端役人は、この歴史を知っているのだろうか。それを陰から操る民主党政権は、間違いなく知っているはずだ。知っていながら、否、知っているからこそ台湾を不当に扱った。そうとしか思えない。

しかし、木端役人や民主党政権が、大陸中国に揉み手をして頭を何度下げようが、

日本人の奥底に息づく台湾との関係を断ち切ることはできない。

また大陸中国においても日本政府の揉み手外交を了（りょう）とはすまい。

救援活動を展開する台湾の仏教団体

これまで世の中は「ヒト・モノ・カネ」の動きだけが注目されてきた。政治、経済活動に限らず、スポーツも文化も、すべては唯物史観の下、「ヒト・モノ・カネ」を表す物量や数字だけが価値を示す単位だった。

東日本大震災以降、日本人の多くは、数量に表せない「何か」が大きな比重で存在するのだと再認識するようになった。大震災以降、結婚相談所が賑わい、合コンの数が倍増、恋人たちが寄り添い、現実婚約指輪や結婚指輪の売り上げが急上昇したとされるのも、そうした理由によるのかもしれない。

男女の間だけではない。大震災直後、多くの人々は人間関係の大切さが身に沁みたはずだ。助け合い精神の復活ともいえる。

東日本大震災が起きた直後、誰よりも早く救援のために被災地に向かった団体があった。日本政府のものでも地方自治体のもでもない。日本の宗教団体でもない。——そんな話を耳にして、その団体の存在を知ったとき、正直なところ衝撃を受けた。それがまた台湾の組織だったのだ。

「中華民国台湾の尼僧、釈證巖法師の主宰される台湾佛教慈濟基金会（〒112 中華民国台湾台北市北投区立德路二号）の日本支部（〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16）による東北大災害地における難民救済活動によって、身も心も絶望感に打ち

日台の歴史的友誼に嘴を入れ、敢えて日台の民衆の反感と反発を買う愚を犯して、中台兩岸和平の推進を自ら止める必要は、大陸中国にはない筈だ。

のめされながらも、懸命に再起を計る被災者を励まし、力付け、明日への光を与えてくれました」と岩手県陸前高田市の被災者 I・O さんから小紙に以下の通りの報せが入った。

「私たち被災者の所へ3月26日の日、4トントラックに物資を満載した台湾の慈濟基金会の人たちが、『すぐに来られなくてすみませんでした』と手を合わせ、『こうしたお手伝いしかできずごめんなさい。とにかく頑張ってください』と沢山の物資と、津波で家族を失った人たちの被災度によって7万、5万、3万円と封筒に入れたお見舞い金を手渡してくださったのです。

正に『地獄に仏』とはこのことだと思いました。私たち被災者に対し、無私の奉仕を尽くしてくださった台湾佛教慈濟基金会の方々の姿こそ、仏様の慈悲の姿だと思い、感謝の涙が止まりませんでした。

私たちは帰途につくトラックを見送り、口々に『ありがとうございました』と手を振り、なかには遠ざかるトラックに手を合わせて拝む人もいました。

私たちは、こうした慈善が新聞やテレビで報道されて当然と思い、毎日新聞やテレビを見たのですが、何の報道もなく、私たちは報道の片手落ちをおかしく思っています。

何故こうしたありがたい慈悲の姿を日本

のあまねく人達に伝えてくれないのか、とても哀しく申し訳なく思っています。

釈證巖法師様の教えを守り、佛の慈悲の心を私たち被災者に具現して下さった台湾佛教慈濟基金會の皆様へ貴社の紙面を借りて、改めて感謝の念をお伝えしていただきたいのです」

という内容であった。

「台湾佛教慈濟基金會」という耳慣れない団体が、被災地でいち早く救援活動を展開したことは、調べてみると間違いない情報であった。

「佛教（仏教）」と名乗っているからには宗教関係であることは間違いない。本紙は原則的に宗教団体の宣伝になるような内容は避けるようにしている。しかし、この「台湾佛教慈濟基金會」の被災地支援活動を見ると、生半可なボランティアとは桁が違っているのだ。

その救援活動は、岩手県から宮城、福島はもちろん東京にまで及んでいる。岩手の陸前高田市を中心に、一関市、大槌町等々では住宅が全半壊した家々に対し数万円の支給を実施。被災地の状況を映像に残して台湾を初め全世界に報道までしている。こうした活動が端緒にあればこそ、台湾からの莫大な義捐金が生まれたのではないかとも思えるほどだ。「台湾佛教慈濟基金會」の支援活動に関して、日本の新聞、TVマスコミがまったく触れていないのが不思議に思える。

絶大な力を有するといわれる日本の宗教法人らの手前、意図的にこの事実を目を背けている情けないわが国のマスコミであるとの声も、被災地の人々から聞こえてくる。

「台湾佛教慈濟基金會」は釈證巖上人（尼

僧）により 1966 年（昭和 41 年）に台湾の花蓮県で創設された慈善団体とされる。現在は本部を花蓮に置き、世界 40 カ国に 100 カ所の連絡所を設けている。

證巖上人は大震災直後に日本人に宛てて「災害御見舞」という書を送られている。そこには冒頭に、

「敬愛する日本の友人の皆様、こんにちは。

大自然が悲鳴を上げていますので、災害が頻繁に起こっております。台湾にいる私たちは一九九九年九月二十一日に大きな災難に遭いました。證巖と全世界の慈濟メンバー一同は今のこの時の皆様の悲痛な心境を見にしみて、痛いほどわかります。そしてどんなに直接手を差し伸べて、傍に付き添いたいわって差し上げたいかわかりません」

と、日本人を真に思いやる温かいメッセージが記されていた。

台湾佛教慈濟基金會からの救援は、現在、本紙が把握しただけで、以下のような膨大なものに及んでいる。

3月11日から4月27日まで（支援は以降も続行されている）			
炊き出し	1800 食	ショール	5840 枚
インスタントご飯	6111 パック	肌着	2649 枚
インスタントスープ	3786 パック	日用品	11 パック
ナッツ	2440 パック	自前食器	1262 セット
五穀粉	4960 パック		
毛布	3962 枚	ボランティア 延べ	144 人

※支援金については不明だが、次号にてお知らせしたい。

「台湾佛教慈濟基金会」の救援活動を詳細に紹介する紙幅が既にないので改めて書くことにしたい。ご興味がある方はご自身でお調べになればよろしいだろう。ここでは最後に、證巖上人の言葉を少しだけ紹介することにする。ぜひ噛みしめていただきたい。

大変な時代では是と非を明確にしなければならぬ。

大災害が起きた時は大慈悲心を養う必要がある。

大きな無明には大きな智慧が要る。

動乱の時期には懺悔しなければならない。

